

古墳時代・続縄文文化の墓

—猪ノ鼻(1)遺跡に検出された土坑墓群の検討①—

木村 高*

1 はじめに

東北地方北部における古墳時代前期の遺構・遺物は極めて少なく、該期の文化様相については不明な点が多い。遺構のほとんどは、北海道域を起源とする続縄文文化系の土坑墓で占められ、居住に係わるものとしては、弥生文化系と古墳文化系の竪穴建物跡が岩手県域北部に少数がみられるにすぎない¹⁾。遺物に関しても不足しており、続縄文土器・弥生系土器²⁾・古式土師器の共伴事例が数遺跡で知られるほかは、土器細片の散発的な出土が大半を占めている。

このような理由により、該期の研究は混沌としているが、これら各系統の遺構・遺物のあり方は、弥生時代終末期以降、続縄文文化と古墳文化の接触が頻繁に起きていたことを示唆しており、列島北端域に展開した歴史的動態を考える上で、看過できない問題を孕んでいる。

歴史的動態の「背景」を明らかにするためには、土器の広域移動や異文化接触の実態、各文化要素の変容過程やその地域差等について、関連情報の多面的な検討が必要となる。

本稿では、これらの課題を考える上で有益なデータを提供した猪ノ鼻(1)遺跡の土坑墓に関する情報を検討し、東北北部における古墳時代前期の墓制とその社会様相を考える。

2 猪ノ鼻(1)遺跡

猪ノ鼻(1)遺跡は青森県の東部、東北新幹線七戸十和田駅から北東約4.4kmの地点、上北郡七戸町字猪ノ鼻に位置している。八甲田山東麓から小川原湖に注ぐ坪川の中流域、標高15~20mの台地縁辺に立地し、周辺には数段の段丘面(多くは畑地・牧草地)と主要河川に沿った谷底平野(水田中心)が分布している(図1)。

調査は2018~2019年に県埋蔵文化財調査センターによって行われ、縄文・古墳・奈良・平安時代・中世・近世の遺構・遺物が多数検出されている(青森県埋蔵文化財調査センター 2021 青埋報第616集)。

本稿で対象とする古墳時代の遺構は、前期の土坑墓6基である。類例は東北地方の全域を見渡してもごく僅かであり、この時期の墓群としては青森県域初の検出例となる(古墳時代前期の土師器の出土としては青森県域で2例目)。

土坑墓には続縄文文化と古墳文化の両要素の混在がみられ、北東北の考古学的空隙を埋める好資料と言える

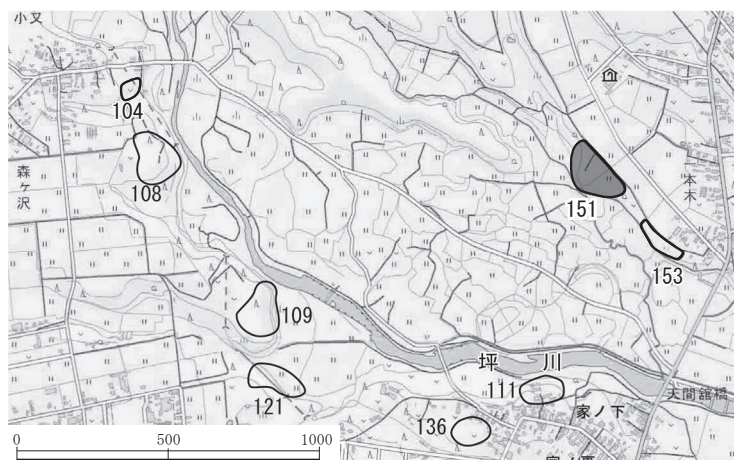


図1 猪ノ鼻(1)遺跡の位置(1/25,000)

(151:猪ノ鼻(1) 104:森ヶ沢 153:舟場向川久保(2))

*青森県埋蔵文化財調査センター

る。なお、本遺跡から僅か南東200mの地点にある舟場向川久保(2)遺跡(図1 : No. 153)からは、弥生時代中期の土坑墓が9基検出され、うち1基からは137点の細型管玉が出土している(折登亮子2022)。また、西方約1.5kmには古墳時代中期の続縄文系土坑墓群で著名な森ヶ沢遺跡(阿部義平2008)が所在しており(図1 : No. 104)、土坑墓20基中17基に各種玉類が伴っている。

発掘調査件数の決して多くない、極めて限定されたこの空間の中に、贅沢な装身具をまとった人物が長期にわたって存在していた様子が浮かびあがる。

3 土坑墓群の概要

本稿で取り上げる古墳時代の土坑墓6基(SK04・SK06・SK07・SK08・SK47・SK55)は、半径6.5mの狭い範囲にまとまっており、続縄文文化に特有な「柱穴状ピット」と「袋状ピット」が付属する4基(A群 : SK06・SK07・SK08・SK47)と、それらが付属しない2基(B群 : SK04・SK55)の2つのタイプに分かれている(図2)(平安時代のSI38によって、数基の土坑墓が消失した可能性は否定できない。報告書参照。)

A群の土坑墓からは続縄文土器、古式土師器・鉄製品(刀子)・ガラス小玉、石製品、剥片、方割石、瑪瑙小礫、赤色顔料塊が出土し、B群の土坑墓からは、古式土師器と各種玉類が出土し、遺物の内容や量にも明瞭な違いが認められる。

以下ではこれら2つのタイプに認められる共通点と相違点、さらに同一タイプの中に認められる共通点と相違点等を確認し、個々の土坑墓の規模や構造、遺物(今回は土器)の出土状態やそれらの編年的位置および、土坑墓群が形成された実年代等について考える。

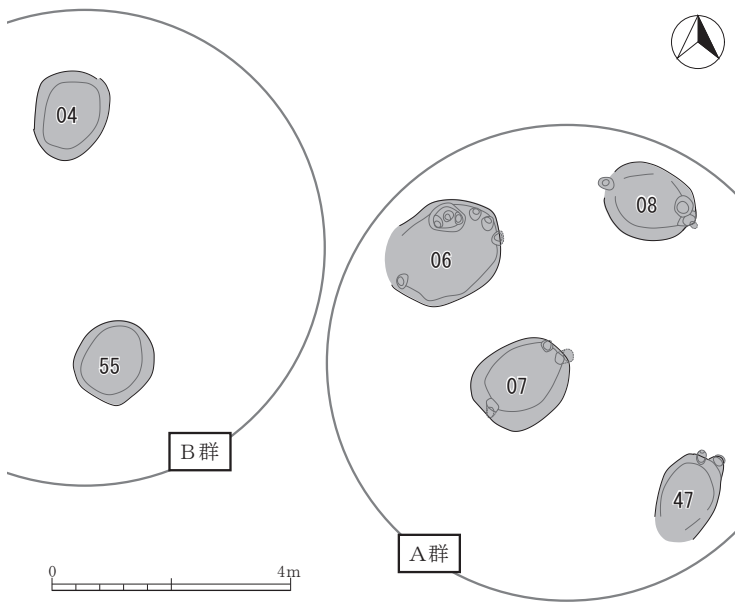


図2 土坑墓の位置関係と構造の違い
土坑墓の網掛けは欠損を一部復元している。他の遺構との重複関係については報告書を参照。

表1 土坑墓の形状・規模・付属施設等

| 群 | 遺構名 | 平面形 | 断面形 | 規 模 | | | | | 柱穴状ピット | | | | 袋状ピット | | 軸方向 | その他 付 属 施 設 | 重複遺構 (新しい遺構) | 備 考 | | |
|-----|------|--------------|--------------|-------|-----|-----|-----|----------|--------|-------|--------|---------------------|----------------------|-----|-----|-------------------|-----------------|-------------|-------------------|------------|
| | | | | 開 口 部 | | 底 面 | | | 深さ | 深さと方位 | | CP1-2 真 々 距 離 | 柱穴状ピ ットとの 位置関係 | 遺物 | | | | | | |
| | | | | 長さ | 幅 | 長さ | 幅 | 長 幅 比 | | CP1 | CP2 | | | | | | | | | |
| A 群 | SK06 | 楕円形 | 箱 形 | 208 | 165 | 184 | 141 | 1.30 : 1 | 54～66 | 38 | 南 西 | 40 | 北 東 | 178 | 右 | 土器 片 | N-56°-E | SK1 Pit1 | SK05 | 平面規模最大 |
| | SK07 | 楕円形 | やや不整 な箱形 | 162 | 138 | 138 | 102 | 1.35 : 1 | 54～59 | 29 | 南 西 | 43 | 北 東 | 162 | 左 | — | N-54°-E | — | | |
| | SK08 | 楕円形 | 丸みを帯 びた箱形 | 160 | 126 | 132 | 93 | 1.42 : 1 | 40～53 | 40 | 西 | 58 | 東 | 164 | 左 | — | N-115°-E | — | SD01 SP3200 | |
| | SK47 | 楕円形 | 丸みを帯 びた箱形 | 150 | 101 | 116 | 83 | 1.40 : 1 | 36～54 | 31 | 南 西 | — | 北 東 | — | 右 | 土器 片 | N-20°-E | — | SD01 SP86, 229 | 底面の長さは図上推定 |
| B 群 | SK04 | やや不正 な楕円形 | 逆台形 | 152 | 122 | 114 | 91 | 1.25 : 1 | 38～49 | — | — | — | — | — | — | — | N-11°-E | — | ST01 | 上部の削平著しい |
| | SK55 | 円形に近い楕円形 | 逆台形 | 138 | 128 | 118 | 96 | 1.23 : 1 | 19～28 | — | — | — | — | — | — | — | N-29°-E | — | SI38 | 上部の削平著しい |

※坑底の計測値は、基本的には図の「下端線」に基づくが、柱穴状ピットをもつA群の土坑墓の長軸長において、柱穴状ピットの上端線によって土坑の下端線が途切れる場合は、図上で弧状のラインを復元して計測している。

4 各土坑墓の形状と規模

【平面形と平面規模】 開口部の平面形はA群が概ね楕円形、B群は不整ないし円形に近い楕円形を呈している。しかし、B群の2基は厚い削平を受けていることから、遺構確認面における開口部平面形の比較にはあまり意味が無い。よって以下では、削平の影響を受けない「坑底面」の平面形を比較する。

坑底幅(短軸長)を1にした場合の坑底長短比を求めると、A群は1.3(SK06)、1.35(SK07)、1.42(SK08)、1.4(SK47)と算出され、数値的にはバラついているように見えるが、図3のグラフで分かる通り、これら4基の長短比は直線的に並び、まとまりを持っていることが分かる。B群についても1.25(SK04)、1.23(SK55)と算出され、まとまった長短比を示している。これらの数値に基づいて両群の坑底面形状を感覚的に表せば、長楕円のA群、円形に近いB群、のようにまとめることができる。

次に坑底の規模についてみていく。6基の坑底長は114cm～184cm、坑底幅は83～141cmの範囲にある。平均坑底長はA群が143cm、B群が116cm、平均坑底幅はA群が105cm、B群が94cmで、A群の方が大型の傾向を示している。しかしこれは図4でも明らかなように、SK06が平均値を引き上げていることから、SK07・SK08・SK47のみでA群の平均を求めると、平均坑底長は129cm、平均坑底幅は93cmとなる。よって、長さはA群の方が長い、幅は両群ともあまり変わらないことが分かる。

A群の方が長く構築されている理由は、長軸両端に構築されている柱穴状ピットの存在が関与していると考えられる。柱穴状ピットに差し込まれる2本の柱は、遺骸安置の前には設置が完了³⁾していて、遺骸は坑底の長軸線上に置かれると仮定した場合、対になる柱穴状ピットの開口部上端線の最短

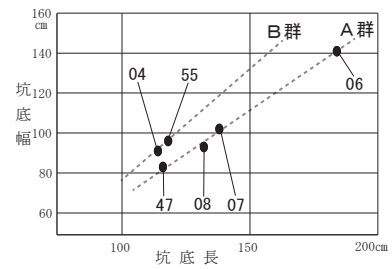


図3 坑底幅と坑底長

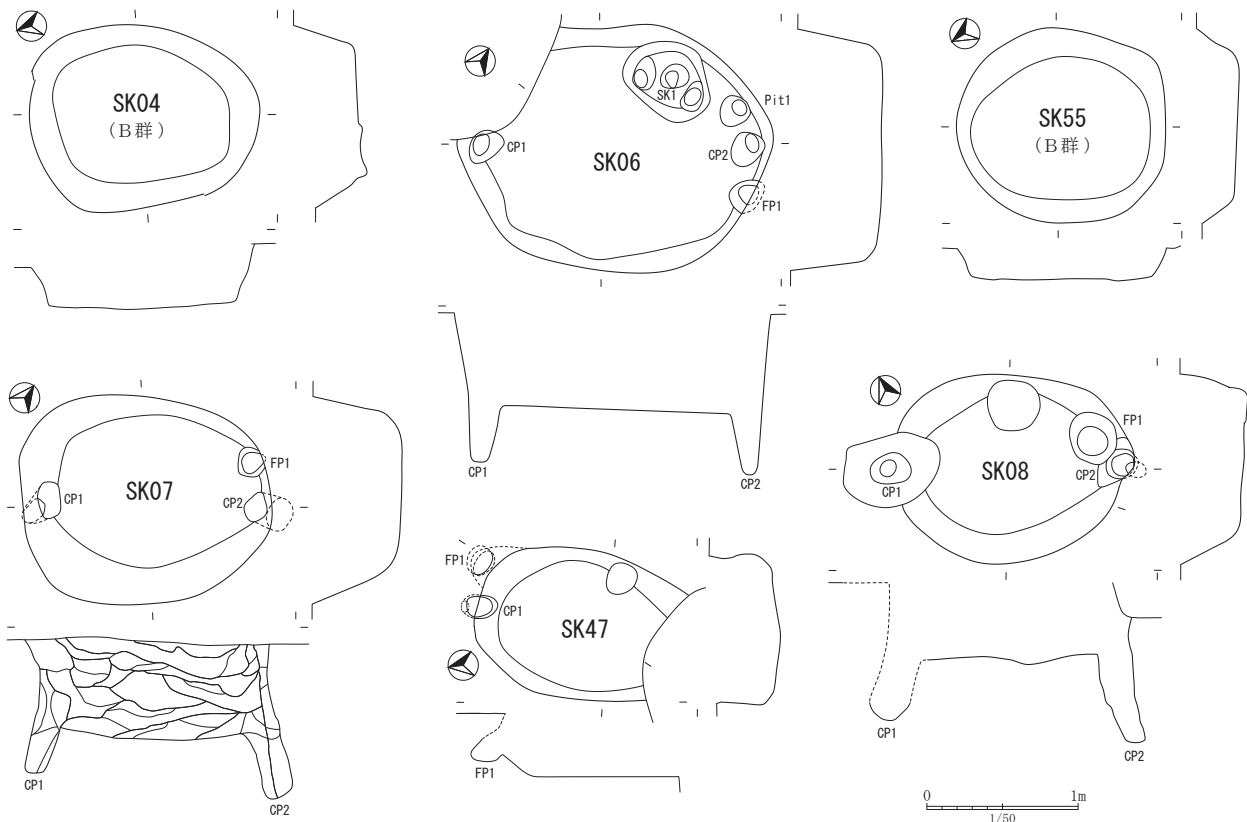


図4 土坑墓の平面形と断面形 (1/50)

他の遺構との重複関係については報告書を参照。

距離(内寸)が遺骸に対する現実的な坑底長となる。

柱穴状ピットの開口部上端線の最短距離は、SK06が150cm、SK07が119cmとなる(SK08とSK47は新しい遺構に壊され、柱穴状ピットの上端線の最短距離を計測することができない)。規模が特大のSK06をB群との直接比較に用いることは適切でないが、SK07はB群の平均坑底長(116cm)とさほど変わらない。このことから、遺骸との関連で見た場合、大型のSK06を除くA群の坑底長は、B群と大きな差は無かったものと推定される。つまり、「遺骸に対する長さ」も両群の間にはさほど違いが無いことが分かる。なお、SK07とSK08の坑底長は138cmと132cmで6cmの僅差、SK47・SK04・SK55も116cm、114cm、118cmと近似しており、土坑墓の構築にあたっては、身体尺のような単位の存在が想定される。

【断面形と断面規模】 断面形は概してA群が箱形、B群が逆台形を呈している。即ち、壁面はA群が直立(垂直)気味、B群は斜めに立ち上がる形が基本となっている。坑底と壁との境は、A群ではSK06のみほぼ直角に仕上げられているが、他の3基は坑底と壁との境が丸みを帯びており、B群はやや角張る傾向がある。底面は、B群のSK04では工具痕と推定される複数の凹みが認められたが、他は総じて平坦である。SK06とSK55は、砂質層を底面にしていることから、かなり平坦な仕上がりになっている。

深さは削平の厚さに左右されることから、一概に比較することは難しいが、A群のSK06とSK07の「深いタイプ」、B群のSK55の「浅いタイプ」、A群のSK08・SK47およびB群のSK04の「中間タイプ」の3タイプを認めることができる(図5)。

極端に浅くなっているSK55は、図5で分かる通り、平安時代の竪穴建物跡(SI38)に上部を大きく削平されている(報告書参照)ためにこのような値を示しているが、SK55の深さを他の土坑墓と同条件にするため、SK55にSI38の深さ(29cm)を補正すると、深さは48~57cmとなり、SK06とSK07の「深いタイプ」に近くなる。

以上のことから、深さはA群のSK06とSK07およびB群のSK55で構成される「深いタイプ」3基と、A群のSK08とSK47およびB群のSK04の3基で構成される「浅いタイプ」の2種に分かれる。つまり、両群とも2種のタイプを含み、その割合は半々であると言える。

以上、AB両群の平面・断面の形状および規模等について、遺骸との関係も含めて見てきた。結果、数値的にはA群もB群も大きな差は無いことが判った。

5 土坑墓の付属施設

5-1 柱穴状ピット

長軸の両端に穿たれた柱穴状ピットは、上屋の痕跡(支柱痕跡)として一般的に理解されている⁴⁾。以下では、これが付属するA群の4基(SK06・SK07・SK08・SK47)についてみていく。

【深さ】 深さは29~58cmまでみられ、平均は40cmである。1基の土坑墓における2個の深さを比較すると、SK06は38cmと40cmで2cmの僅差、SK07は29cmと43cmで14cm差、SK08は40cmと58cmで18cmもの差がある。このことから、両ピットの深さを均しく仕上げる必要は特に無く、腕の届く範囲でなるべく

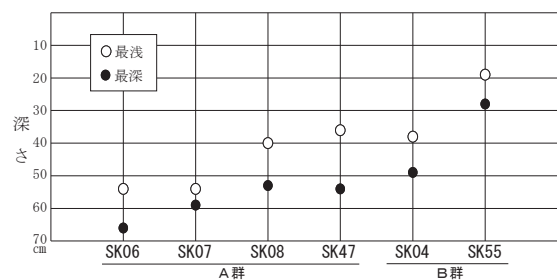


図5 土坑墓の深さ

深く掘り込まれたものであったようである⁵⁾。

【真々距離】柱穴状ピットの底面における真々距離は、SK06・SK07・SK08それぞれ178cm、162cm、164cmを測り、SK07とSK08の差は僅か2cmであり、偶然とは思えないほど近似している。

【断面形】SK06を除く3基の柱穴状ピットは「ハの字状に内傾」している。この形状は、上屋の安定を意図した工夫等ではなく、構築者の作業姿勢によって形成されたものであることが筆者の経験により明らかである。即ち、狭い土坑に入り、坑底と壁面の境に柱穴状ピットを掘る場合、頭は壁面に密着するため、腕先を見ることはできなくなり、垂直に掘り下げているつもりであっても、身体構造の関係から、徐々に斜め奥に掘り進んでしまうのである。このことから、建てられた柱は内傾していた可能性はあるが、それは意図された傾きではなく、人体構造から生み出された傾きである。一方、SK06の柱穴状ピットは2個とも垂直に掘り込まれているが、これは姿勢を自由に換えられる広い土坑墓であったことから、頭を壁面に密着させる必要がなく、作業しやすかった為であると考えられる。

以上より、柱穴状ピットの傾斜の有無は、時期や系譜などとは関係しない属性であると言える。

【柱痕】柱穴状ピットの埋土は全てにおいてしまりが無いことから、柱は抜かれることなく腐朽していったようである。ただしこの状態のみでは、柱の根元だけが切り離されて土坑墓内に残った状況も想定し得るが、SK07の柱穴状ピット(特にCP2)の埋土上位には、柱穴状ピットから上方に伸びる縦方向の土層ラインが認められた(図4)。このラインは、柱穴状ピットから続く柱痕を示している可能性があり、仮にこれが柱痕であるならば、柱は土坑墓の埋め戻し段階においてそのまま存在していた可能性がある。

土層断面に現れたこの柱痕層(推定)の幅は、実際の柱よりも狭く見えている可能性が高いが、壁面にしっかり沿っている状況から、柔軟性の高い材が用いられていた可能性が考えられる。

【その他】SK06とSK07の柱穴状ピットの上端より上位の壁面には、幅15cm内外、奥行き1cm未満の「縦板状の凹み」が認められている。これは図化が不可能なほど微妙な凹みであるが、土坑墓内部に入って壁面を見渡すことで、容易に視認できるものである。検出位置より、柱穴状ピットと一体のものであったことは確実だが、この凹みは柱穴状ピットに柱を差し込む前、あるいは差し込む際に、ピット上方の壁面を板状のもので擦って、柱を壁面に密着させるために施された調整の痕ではないかと推定される。模式図は図6のようになる。

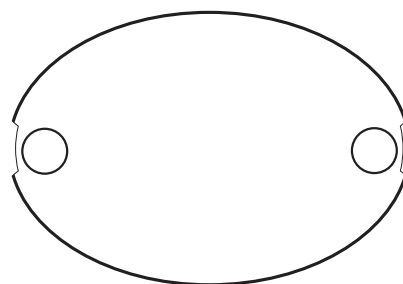


図6 縦板状の凹み模式図

5-2 袋状ピット

袋状ピットが付属するA群の4基(SK06・SK07・SK08・SK47)についてみていく。袋状ピットは、坑底と壁面の境ないし壁面の一部が水平～斜めに掘り込まれているもので、副葬品を納めるための施設と一般的に考えられている。

【個数と形態】A群の4基に1個ずつ伴っており(SK06FP1・SK07FP1・SK08FP1・SK47FP1)、SK06・SK47・SK07は北東側柱穴状ピットの付近に、SK08は東側柱穴状ピットの至近に構築されている。但し、これらの中で典型的な袋状ピットは、横方向への挟りが強いSK47FP1のみで、SK06FP1とSK07FP1は「袋状」の程度が弱く、僅かに土坑墓の上端ラインを超える程度のものである。SK08FP1は横方向への

挟りが無く、平面プランの中に収まっていることから、厳密には袋状を呈していないものであるが、他の土坑墓における検出位置より、本遺構も同類と見なした⁶⁾。

【位置と出土遺物】全てが北東～東側の柱穴状ピットの近くに構築されている⁷⁾。土坑墓内から袋状ピットを見た場合、SK06FP1・SK47FP1は柱穴状ピットの右側に、SK07FP1・SK08FP1は柱穴状ピットの左側に構築されている。この左右の違いが何を表しているのかは不明であるが、柱穴状ピットの右側に構築されているSK06FP1とSK47FP1には土器片(SK06FP1に古式土師器、SK47FP1に続縄文土器)が置かれたような状態で出土しており、柱穴状ピットの左側に構築されているSK07FP1とSK08FP1に遺物は伴っていない。

この土器片の存在により、柱穴状ピットの左右で副葬品の内容や副葬の方法などに違いがあった可能性が考えられる。その背景には、埋葬時期や年齢・性別・死因などの要因が関係している可能性もある。なお、これらSK06FP1・SK47FP1出土の土器片はいずれも底面から浮いていることから、有機質の(容器などの)副葬品の上に蓋のように載せられたものとみることにも可能である。その場合、「土器片」は副葬品の一部、あるいは副葬行為に伴う儀礼具だった可能性も想定できる。

5-3 その他の付属施設

SK06底面の北壁寄りにはSK06SK1とSK06Pit1が付属しており、これらの施設は他の土坑墓にはみられないものである。SK06SK1は楕円形土坑の底面に柱穴の下端のような凹みが3個並ぶもので、SK06Pit1は柱穴の下端のような凹みが1個単独で存在しているものである。「柱穴下端のような凹み」は、袋状ピットに類似し、SK06Pit1は、付近の柱穴状ピット(SK06CP2)を中心に、袋状ピット(SK06FP1)と対称的な位置にある。これらのことから、SK06SK1とSK06Pit1はその位置と形態から、袋状ピットと同等の機能を有した可能性がうかがわれる。

6 土坑墓の軸方向

軸方向について、A群は柱穴状ピットを結んだ長軸線を採用した。

B群のSK04、A群のSK47・SK55の3基はそれぞれN-11°-E・N-20°-E・N-29°-Eを指向し、ある程度のまとまりを形成している。SK06とSK07はN-56°-EとN-54°-Eでほぼ同一と言えるほど指向が近似している。一方、SK08は他の5基とは全く異なり、単独でN-115°-Eを指向しており、SK47とはほぼ直角の関係にある。このように、軸方向は大きく3つに分かれている。

現地は殆ど勾配がないことから、これらの軸方向は地表面の傾斜には影響されていないと推定されるが、土坑墓群の南～南西は崖状になっており、谷底平野との比高は9mもあることから、これら6基の軸方向は、周辺の地形や景観が意識されている可能性が高い。

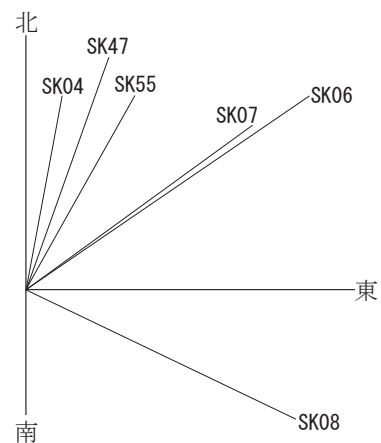


図7 土坑墓の軸方向

7 遺物の出土状態

各土坑墓から出土した遺物の内容と数量は表2の通りである。土坑墓間における遺物の多寡を比較しやすくするため、点数は○を用いて模式化している(1つの○は1点を示す)。剥片は、儀礼具と

して撒布されたものと土壌に元々混入していたもの、後世に混入したもの、といったように様々な背景が推定されることから、○ではなく有無ないし感覚的な量を記した。

土器はSK08以外の全土坑墓から出土している。土器が伴わないSK08は、袋状ピットの形態や軸方向等の面において他の土坑墓とは区別される傾向が強い。

表2 土坑墓出土遺物一覧

| 群 | 遺構名 | 土器類 | | | | | | 玉類 | | | 石器・石製品類 | | | | | 重複遺構 (新しい遺構) | 備考 |
|----|------|----------------------|----|----|------|-------------|----------|----------------|-----|------|-----------|-----|-----------|------------|-----------|-------------------|---|
| | | 続縄文土器 台付鉢 台付深鉢 | 注口 | 不明 | 無文土器 | 古式土師器 高坏 | 壺 | 石製 | 琥珀製 | ガラス製 | 鉄製品 剥片 | 方割石 | 瑪瑙小礫 | 石製品 石製品 | 赤色 顔料塊 | | |
| A群 | SK06 | ○○○ ○○ | ○ | ○ | | | ○ ●複合 | | | ○○○○ | 有 | ○ | | | | SK05 | ●：複合口縁壺、同一個体 (SK06：体部～底部) (SK07：口縁部～肩部) |
| | SK07 | | | | | | ●複合 ○ | | | ○○ | ○ | 有 | ○○○ ○○ | ○ | ○ | | |
| | SK08 | | | | | | | | | | | | | | | SD01 SP3200 | |
| | SK47 | | ○ | | | | | | | | ○ | 有 | | | | SD01 SP86, 229 | |
| B群 | SK04 | | | | | ●坏部 | ○ | ○○○○○ ○○○○○ | ○○ | | 微量 | | | | | ST01 | ●：赤彩、同一個体 (坏部と脚部が接合) |
| | SK55 | | | ○ | | ●脚部 | | | | | 微量 | | | | | SI38 | |

※ SK06を切るSK05(平安時代)出土のガラス小玉はSK06に含め、SK04を切るST01(平安時代)出土の琥珀玉はSK04に含めている。

※ 明らかに混入と見なされる土器細片と鉄関連遺物は含めていない。

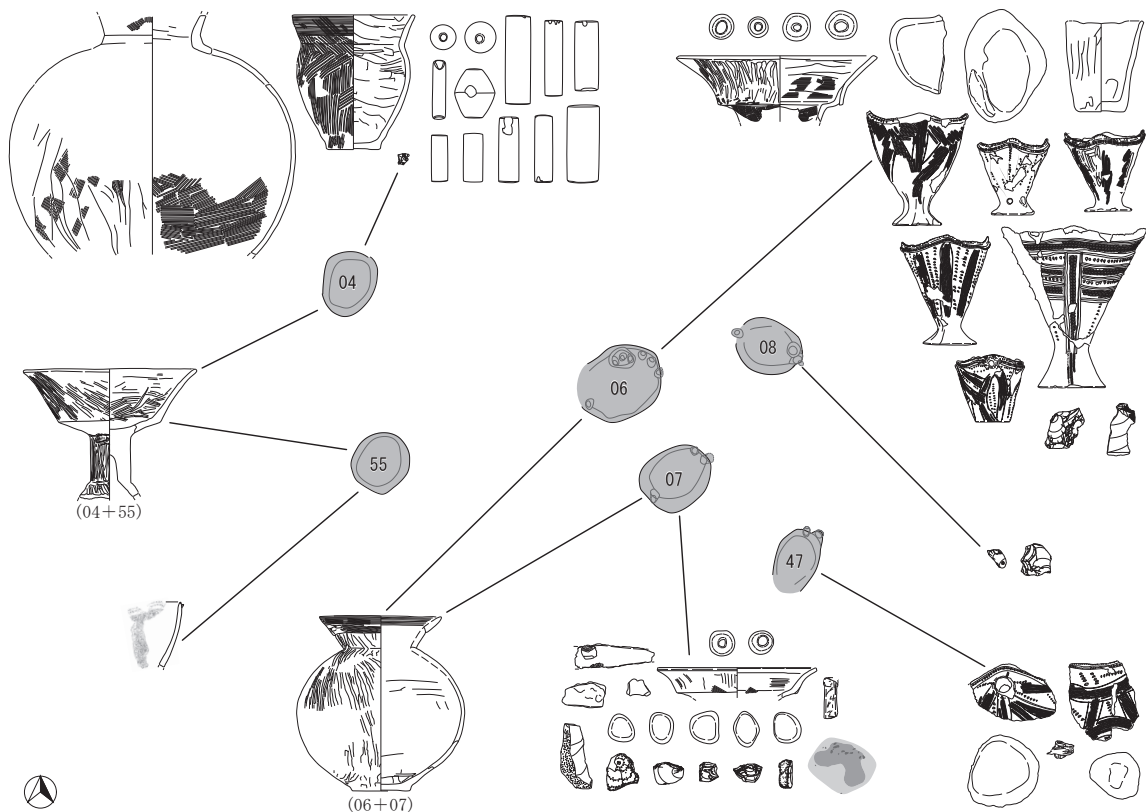


図8 土坑墓からの出土遺物

土器細片と剥片の多くは掲載を省略している。遺物のスケールは統一していない。

7-1 続縄文土器の出土状態

続縄文土器は、A群のSK06・SK47、B群のSK55の3基から出土しており、全てが後北C2・D式である。土坑墓の半数以上が続縄文系の構造で占められているにもかかわらず、その出土量は多くない。続縄文系土坑墓のA群4基の中で、続縄文土器が出土しているのはSK06とSK47の2基のみであり、続

縄文系土坑墓とは断定できないB群のSK55からも小破片が出土していることから、続縄文土器の存在有無と土坑墓形態との間に相関関係は見い出されない。

SK47からは後北C2・D式の注口土器が1個体(2片: 3927, 3928)、SK55からは小型の後北C2・D式が1個体(報告書刊行後、遺物図40-2, 5が接合)出土している。

SK47の個体は標準的なサイズの注口土器であるため、実生活で使用された可能性もあるが、SK55の個体はかなり小型であることから、副葬用に製作されたものである可能性がある。

墓の規模が最大であるSK06からは、他の土坑墓にはみられない良好な個体が複数出土している。以下ではSK06から出土した6個体の続縄文土器について検討する。

【SK06の続縄文土器】SK06の埋土上層には、中型の台付深鉢(373)が1個体、その下位レベルには小型の5個体(以下、「小型5個体」)が2つのブロック(ブロック1, 2)に分かれて出土している。ブロック1は、台付深鉢(372)と注口(371)の2点のセット、ブロック2は、台付深鉢(382)・台付鉢(383・381)の3点のセットで構成されている。(※372などの遺物番号は「報告書の遺物図37-2」の省略表記である。)

中型の台付深鉢(373)は内面に煤が付着しており、実生活での煮炊、あるいは葬送儀礼に伴う煮沸行為に用いられた可能性がうかがわれる。一方、小型5個体に使用痕は認められず、胎土や焼成、サイズ等の面に類似点が多いことから、これらは葬送儀礼用(供献用)に特別製作されたものと推定される⁸⁾。

器種は注口、台付深鉢、台付鉢の3器種であり、液体を「注ぐ器」と「入れる器」で構成されている。出土状態の面においても供献品と見なされるものであるが、儀礼の場面において、飲食行為や液体の撒布等に用いられた可能性も想定される。

中型の台付深鉢と小型5個体の内、4点に付けられた「台」は、北海道の後北C2・D式には本来的に存在しない。よって、「台」は続縄文文化の圏外、即ち古墳文化圏から流入した属性と考えなければならない。台部の側面に貫通孔のあるもの(381)まで存在していることから、これらは古式土師器の高坏や器台の脚部、台付甕、

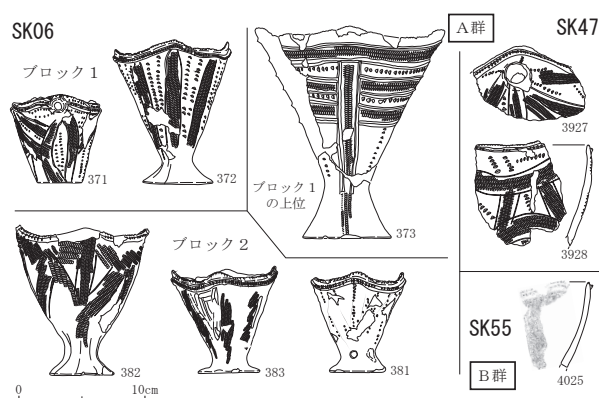


図9 続縄文土器(後北C2・D式 S=1/6)

※4025は報告書「遺物図40-2」と「遺物図40-5」が接合したもの。

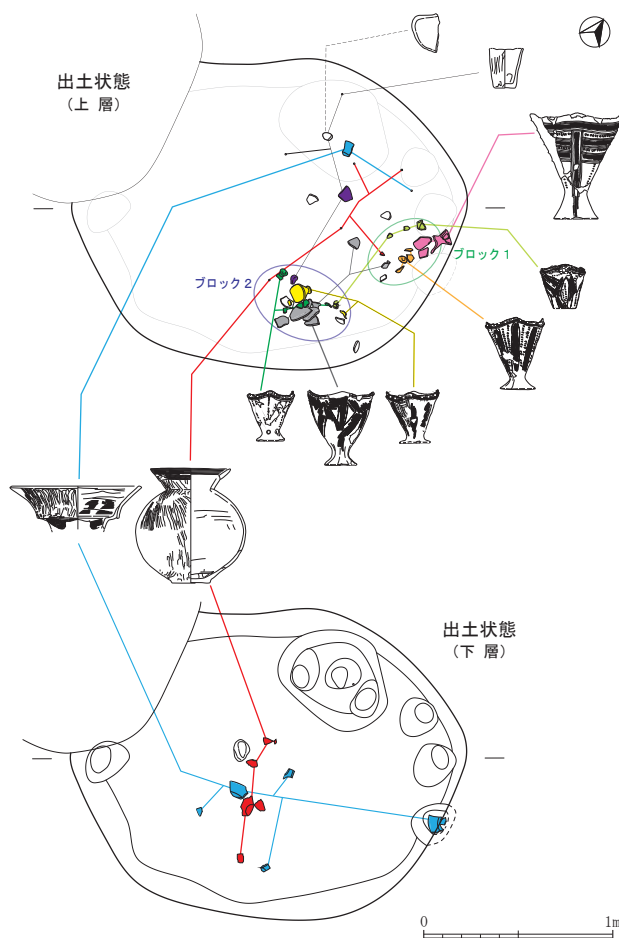


図10 SK06 土坑墓における遺物出土状態(平面)

台付の小型土師器等の影響によって生まれたものと推定され、「折衷」の在り方を考える上で重要である。

ブロック1の2個体に微隆起線は施されていないが、狭い表面積にもかかわらず、縄文・(微隆起線の代用の)沈線・刺突・刻目貼付帯が非常に丁寧に施され、器壁も薄く作られていることから、これらは土器製作を専門的に担っていた人物の手によるものと推定される。

一方、ブロック2の3個体をみると、全てがブロック1よりもやや厚く作られており、381は縄文の施文が無く、奔放な印象の沈線と刺突が施されており、383には刺突と沈線が無く、382には刺突が無いばかりか、縄文原体を器面にあてがう最初の角度

を誤り、斜縄文風の帯縄文になっている箇所がみられるなど、文様要素の欠落や施文の粗雑さ等が目につく。ただし、381の刺突は極小で沈線は極狭、383にはミガキ後の微隆起線文の貼付と外底面への縄文施文、382は胎土の調合と器面調整および器体の均整が優れているなど、各個体には簡素、拙劣と慎重、丁寧といった要素がアンバランスに同居している。このことから、これら3個体の器体の「成形」は土器製作を専門的に担っていた人物が行い、「施文」は工具使用に不慣れた人物(たとえば土器製作の門外漢である会葬者など)が行ったものと推定される⁹⁾。

5個体とも小型品である故、施文には難しい面があったと推察されるが、ブロック1よりもブロック2の方が、はるかに文様の要素と構成が変形～単純化している。

文様の要素と構成が変形～単純化している状況は、型式学的には「退化」と見なされることが多いが、仮にそのような見方でこれらブロック2の3個体を解釈すると、ブロック1よりは後出のものと捉えられる。しかし、ブロック1と2はほぼ同レベルから近接して出土していることと、会葬者など門外漢による施文の可能性等を考慮すると、ブロック1との間に想定できる時間差は、あっても数日～数年程度となろう。よって、ブロック1・2の間に大きな時間差を想定する必要は無いと考えられる。

7-2 古式土師器の出土状態

古式土師器はA群のSK06・SK07、B群のSK04・SK55の4基から出土している。A群では、SK06・SK07の両土坑墓からそれぞれ二重口縁壺と複合口縁壺の2器種が出土、B群では、SK04から壺・甕・高坏が出土、SK55から高坏が出土している。

【A群の古式土師器・二重口縁壺】SK06・SK07の二重口縁壺(以下、「06個体N」・「07個体N」)は、大小の破片で構成されており、いずれも破砕された¹⁰⁾ものと推定される。06個体N(3616)は、堆積土の上位～底面付近および袋状ピットから出土し、07個体N(391)は、堆積土の中～下位から出土している。

出土状況をみると、06個体Nも07個体Nも大型破片は「置かれたもの」、小型破片は「撒かれたもの」である可能性が高い。即ち、06個体Nの大型破片は副葬品、07個体Nの大型破片は供献品、そして両個体の小型破片は儀礼具のようなかたちで機能した可能性が想定される。

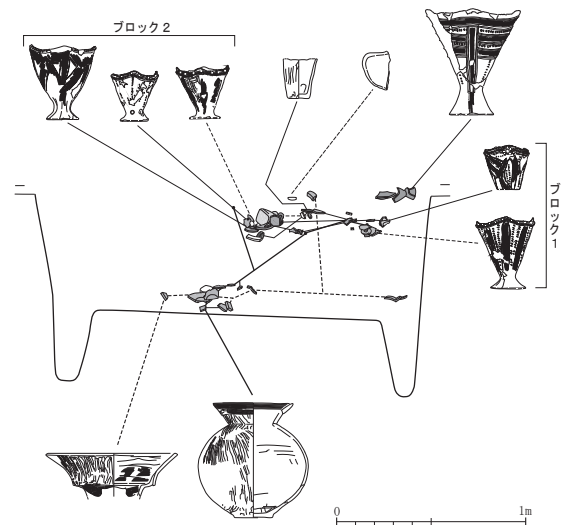


図11 SK06 土坑墓における遺物出土状態
(断面：上層～下層)

二次口縁部の状態を比較すると、06個体Nの二次口縁は縦幅が広く、厚みもあるのに対し、07個体Nの二次口縁は縦幅が狭く、薄手である。重量感のある06個体Nと華奢な07個体Nという印象は鮮明で、意図的に区別されていた可能性がある。両者とも被熱しており、06個体Nには内面に微量

の煤付着とハジケがみられ、07個体Nの一部には火色があり、器体が硬化している。かなりの高温で加熱されたものと考えられる。

以上のことより、06個体Nと07個体Nは、加熱→破碎→二次口縁部の集約→副葬／供献→撒布という、一連の経過を辿ったものと推定される。なお、これら06個体Nと07個体Nにおいて興味深いのは、両者とも残存部位が二次口縁部だけである点である（一次口縁部の残存はごく僅か）。この共通点は、これら2個体が意図的に破碎され、二次口縁部だけが副葬・供献の対象として選択されたことを示しているだけでなく、両土坑墓の被葬者間に存在した関係性や、同一の儀礼執行者が両土坑墓の葬儀に携わった可能性、両土坑墓間の時間差は大きくなかった可能性など、いくつかの想定が可能となる。

【A群の古式土師器・複合口縁壺】SK06・SK07の複合口縁壺（以下、「06個体F」・「07個体F」。図12に示した「06+07個体F」は、これら2個体を図上合成したものである。）も先の二重口縁壺と同様、破碎されたものと推定され、大小の破片で構成されている。06個体Fは堆積土の上位と底面付近から、07個体Fは堆積土の中～下位から出土している。これらは元々の器体の脆さもあって、かなり細かく碎けており、内面は被熱？による器面荒れが著しい。06個体Fは体部～底部付近を中心とした破片（口縁部破片も僅かにあり）で構成され、07個体Fは口縁部～肩部を中心とした破片で構成されている。

出土位置をみると、先の二重口縁壺と同様、06個体Fも07個体Fも大型破片は遺骸の近くに「置かれたもの」、小型破片は「撒かれたもの」である可能性が高い。06個体Fの大型破片は底部であり、坑底近くにおいて先の二重口縁壺（06個体N：3616）の大型破片に並んで出土、07個体Fの大型破片は頸部～肩部であり、堆積土の下位から出土している。それらの出土位置より、両個体の大型破片はともに副葬品であり、両個体の小型破片は儀礼具のように機能した可能性が想定される。

これら2つの個体（06個体F・07個体F）は調査時において、類似個体が2個存在していると考えられていたが、接合作業を精細に行ったところ、1個体（3614[下半：06個体F+上半：07個体F]）であることが判明した。即ち、1つの個体が分割されて2つの墓に副葬されていたのである。このことから、先に述べた両土坑墓の被葬者間に存在した関係性や同一の儀礼執行者が両土坑墓の葬儀に携わった可能性、両土坑墓間の時間差は大きくなかった可能性（もし時間差が大きかった場合、最初の葬儀の段階で、次の被葬者に副葬・供献する残りの破片を保管しておくのは難しくなる）等、いずれの可能性もより強く肯定されることとなる。

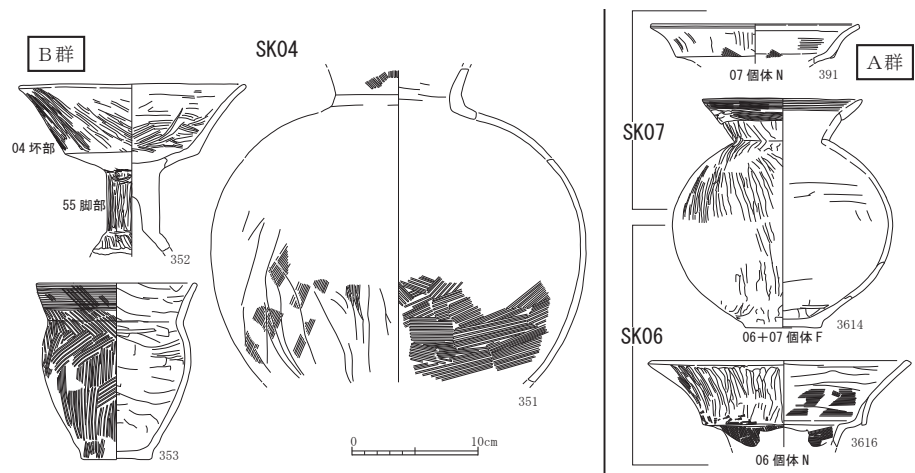


図12 古式土師器（古墳時代前期 S=1/6）

これらA群のSK06・SK07は、続縄文文化系の土坑墓であるにもかかわらず、副葬品として古式土師器が選択されている点は重要である。SK06は上位層に続縄文土器が供献されていることから、土坑墓形態と葬送儀礼の「一部」が同一の系譜でまとまっているが、続縄文土器が全く伴わないSK07については、SK06よりも複雑な解釈が必要となる。

妥当性の有無はともかく、ここで被葬者と儀礼執行者・会葬者達の出自を単純に想定するならば、両遺構とも土坑墓の構築者／儀礼執行者は続縄文文化系であり、被葬者は古墳文化系、ただし、SK06は会葬者／儀礼執行者が続縄文文化系(SK07の会葬者は不明)、のようにまとめることができる。

しかし被葬者は、古墳文化系の文物を好んだ続縄文文化系の人物であった可能性も否定できない。

「土坑墓形態と葬送儀礼・副葬品は必ずしも同一の文化要素で一式を構成しない…(中略)…続縄文文化系土坑墓の被葬者・会葬者が在地古墳文化系の出自であったり、古墳文化系土坑墓の被葬者・会葬者が続縄文文化系の出自であるなど錯綜的な状況」(木村高2011)という指摘は、北大Ⅰ式期以降の事例に基づいた言及であったが、今回のSK06とSK07の事例により、このような現象は後北C2・D式期にまで遡ることが確実となった。

【B群の古式土師器・赤彩高坏¹¹⁾】B群のSK04からは、白色に焼成された壺(351)が上位層に、赤彩された高坏(352)とハケメの施された甕(353)が下位層に出土し、SK55からは、赤彩高坏(352)が下位層に出土している。以下では、両土坑墓から出土した赤彩高坏(352)について見ていく。

SK04とSK55の間には、上述のSK06とSK07における遺構間接合(複合口縁壺3614[06+07個体F])の例に酷似する状況が認められる。352の赤彩高坏は、坏部がSK04(以下、「04坏部」)から出土、脚部がSK55から出土(以下、「55脚部」)し、接合したものである。

04坏部は、SK04の下位(上部は20cm程度の削平を受けている可能性がある)で正立状態で出土しており、位置的には、遺骸の上面～側面あたりに副葬された可能性が想定される。水平を保って出土したことから、内部には食物などの有機物が入っていた可能性もうかがわれる。

04坏部の遺存状態に注目すると、底部中央には(底部穿孔につながる要素かどうかは不明であるが)脚部がもぎ取られた結果生じた円孔が空いている。また、口縁部の一箇所には半月状の大きな欠損があり、他にも2箇所に打ち欠きとみられる欠損が認められる。これらの欠損部の存在は、器体が壊されているという点において、SK06・SK07との共通性が認められるが、SK06とSK07の例のように、小破片を撒布するような破碎行為には至っていないようである。しかし、SK04出土の白色に焼成された壺(351)とハケメの施された甕(353)は、破碎されて撒かれたような出土状態を示していることから、この赤彩高坏は他の2個体とは扱いが異なっていた可能性が高い。

55脚部は、坏部側の割れ口と裾部が打ち欠かれて「糸巻き」のような形状を呈しており、単体で見ただけでは「土製品」として機能したものに見える。出土状態はSK55の南西側下位(上部はSIによって29cm程度の削平を受けている)に横倒しの状態で出土し、明らかに副葬品と見なされるものである。

A群のSK06・SK07とB群のSK04・SK55の間には、土坑墓形態における共通点はみられないものの、1個体の土器を分割し、2基の土坑墓に副葬／供献する儀礼は、古墳時代前期の猪ノ鼻地区の集団が保持していた葬送儀礼の一部と見なされる。

以上のことから、A群のSK06とSK07の時間差、そしてB群のSK04・SK55の時間差はもとより、A群のSK06・SK07とB群のSK04・SK55の間の時間差もそれほど大きくなかったことが推察される。よっ

て、A群とB群の被葬者や会葬者達は、続縄文文化を基盤にしながらも、古墳文化の要素を積極的に取り込んでいた1系統の集団(一族)だった可能性が高いと推定される。

8 土器の編年的位置

【SK06の続縄文土器】ブロック1, 2の小型5個体は、葬送儀礼用に製作された可能性と、小型品であることによる技術的制約が加わっていることから、既存編年との照合は慎重に行う必要がある。よってここでは、“変容”の著しいブロック2の3個体(出土状態より、ブロック1とほぼ同時期と推定される)は除外し、時期判別に有効な文様モチーフを有するブロック1の2個体を既存編年に照らしてみる。

微隆起線が沈線で代用されているが、注口土器(371)の注口部の下位には括弧状のモチーフがみられ、台付深鉢(372)には縦位の帯縄文がみられる。これらは大沼忠春(1982)による「一般的なC2・D式」の新しい部分、大島秀俊(1991)による北海道小樽市蘭島餅屋沢遺跡編年の「Ⅲ群」、鈴木信(2003)による「後北C2・D式「中2」」に位置づけられると考えられる。

これらの編年的位置を木村高(2011)による時期区分を用いて古式土師器に対応させると、ブロック1は、次山淳(1992)の塩釜式「2段階」の後半～「3段階」の前半、辻秀人(1995)の「Ⅲ-1」～「Ⅲ-2」の前半、米田敏幸(1991)の「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」の後半～「布留式期Ⅱ」の前半に位置する。米田の「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」の後半～「布留式期Ⅱ」の前半は、西村歩(2011)によると、「布留式中段階古相」の後半～「布留式中段階新相」の前半に対比され、この時間幅は田嶋明人(2008)によると「漆町8群」の後半～「漆町10群」の前半に相当する。以上のことから、SK06から出土したブロック1の2個体とブロック2の3個体は、田嶋(2008)の「漆町9群」を中心とした時期に並行するものと考えられる。

【SK06・SK07の古式土師器】06個体Nと07個体Nの二重口縁壺は、両者とも口縁部のみの残存であるため、時期の絞り込みには限界があるが、06個体Nは比田井克仁(2004)による二重口縁壺の分類「B2類」に該当し、「B2類」は、「墳墓出土二重口縁壺の変遷」の「c1段階」～「c2段階」の前半に置かれている。これら2つの段階は、米田編年(1991)の「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」～「布留式期Ⅱ」に並行するとされている(比田井2004)。

07個体Nは、比田井分類の「A類」に類似し、この類は畿内では、「Ⅴ様式後葉から…(中略)…布留Ⅳ式」あたりまで長期的に存在し、関東では比田井編年の「Ⅰ段階」に収まるとされる。比田井の「Ⅰ段階」は、米田編年(1991)の「庄内式期Ⅰ」～「庄内式期Ⅳ」に並行することから、07個体Nは、06個体Nよりも古く位置づけられる。しかし、06+07個体Fの複合口縁壺は、比田井(2001)による南武蔵編年の「Ⅱ段階」に該当し、この段階は「布留式でもⅠ式を中心」に並行するとされている(比田井2004)ことから、06個体Nとの時間的な齟齬は無い。

以上をまとめると、06個体Nと06+07個体Fは、米田編年(1991)の「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」～「布留式期Ⅱ」の中に収まり、07個体Nは、畿内における存在期間を採用した場合は、06個体Nと06+07個体Fに並行するが、関東における出土傾向を採用した場合は、古く位置づけられる。

この07個体Nの時間的位置をさらに検討すると、07個体Nと06+07個体Fに類似した資料は、神奈川県横須賀市内原遺跡の資料に基づく西川修一(1981)の分類の中に見出すことができる。07個体Nは、器形が西川分類の「A3類」に近似し、「屈曲部に断面三角形の粘土帯を接合」という特徴も備えている。また、06+07個体Fは、「複合部分の幅が比較的広」く、「ハケメを丁寧になで消」し、「球形の胴部」

という3つの特徴が共通し、西川分類の「B1類」に該当する。これら「A3類」(07個体N)と「B1類」(06+07個体F)は、西川(1981)の編年では同時期(「Ⅱ期」)に置かれている。よって、07個体Nのみが古く位置づけられるという上述の状況は、西川の編年と出土状態の整合からみて成立しない。

以上のことから、06個体N・07個体Nの二重口縁壺と3614(06+07個体F)の複合口縁壺は、米田編年(1991)の「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」～「布留式期Ⅱ」に並行する。

米田の「庄内式期Ⅴ・布留式期Ⅰ」～「布留式期Ⅱ」は、西村歩(2011)によると、「布留式古段階新相」～「布留式中段階新相」に対比され、この時間幅は田嶋明人(2008)によると「漆町7群」～「漆町10群」に相当する。即ち、SK06・SK07の古式土師器は、「漆町8群」～「漆町9群」を中心とした時期に並行するものと考えられる。

【SK04+SK55の赤彩高坏】この高坏(図12-352:以下、「猪ノ鼻型高坏」)の類例についてはかなりの地域にわたって調べたものの、好例と言えるものは皆無であった。中実脚高坏、柱状脚高坏、屈折脚高坏等の系譜を汲む中で生まれたものであると思われるが、好例が全く見いだされないこの状況は、変容要素を多分に含んでいることの表れであり、胎土分析による地元産の可能性(パリノ2021)を強く肯定するものでもある。仮にそうであった場合、類例の探索にあたっては、オリジナルを模倣する過程で加わったとみられる変容要素を最大限に捨象する必要がある。製作者の個人的な工夫や製作時の背景、粘土の按配に左右されたとみられる要素など、考慮されるべき要素はきりが無いが、少なくとも古墳文化の圏外で製作された「模倣品」であることに留意しなければならない。

そのような観点で坏部と脚部を切り離して類例を畿内以東に求めると、有稜の坏部は畿内以東に広く分布し、その存在期間は弥生後期後葉～古墳時代中期までと長期にわたる。よって、稜の有無を時間的位置の推定に用いることはできないが、稜をもつ坏部の「口縁部の立ち上がり」に注目すると、猪ノ鼻型高坏のように外反するものは割合に少ない。

古式土師器の時間軸として採用されることの多い漆町編年において、高坏と器台の中における「外反」という属性は、漆町5群～8群までの期間に存続していることが分かる。(これ以降は外傾～内湾するものが主流となるようである。)

次に「柱状」脚部は東海地方では希薄であるが、近畿以東の広い範囲に分布し、これも時間的位置を絞り込む際の指標にはなり得ない。しかし、脚部についても同様に、漆町編年にその存在を確認すると、柱状気味のものを含めた場合、漆町5群～11群の期間で長期継続していることが分かる。つまり、漆町編年における坏部の「外反」は漆町8群まで、「柱状」脚部は漆町11群まで存在している。

このように見ていくと、「外反」と「柱状」が共存する猪ノ鼻型高坏は、最新であっても漆町8群の所産とみなされるが、SK04においてこれに共伴した玉類に含まれる滑石製の管玉(報告書の遺物図35-13)の出現は、大賀克彦(2021)によると「古墳時代前期中葉以降」である。

大賀(2002b)によれば、滑石製管玉の出現は大賀の時期区分「前Ⅳ期」以降であり、「前Ⅳ期」(大賀2002a)は、漆町9群に並行する(石橋宏・大賀克彦・西川修一2016)。以上、ここまでの検討により、猪ノ鼻型高坏の時期は、漆町9群～11群に絞り込まれる。

漆町編年(田嶋明人1986)を用いてさらに時期の絞り込みを試みると、漆町の高坏は、「F類 内湾気味に開く坏部に「八」の字状に開く脚部が伴う…」(柱状ではない)と「H類 途中で屈曲して広がる坏部と、脚裾部で強く屈曲外反する脚部をもつ…」(柱状)に分類され(報告書第135図)、猪ノ鼻(1)型高坏は概ね「H類」に属す。また、漆町の各群の高坏の特徴をみていくと、漆町7群「Fが主体を占める…

Hの古相例かと推定される…」(報告書P141)、漆町8群「Fが主体を占める。定型化したHの確実な共伴例はない…」(P144)、漆町9群「F主体のあり方からH中心となると推定…Fは少量残存…」(P149)、漆町10群「H1が主体を占め、少量のH2、H3がみられる…Fは…確認出来なくなる」(P153)とされている。

F→Hという変遷の中で、漆町7群の中には「古相例かと推定される」Hが含まれ、漆町9群は「H中心」と推定されている。これらの記載に従うと、猪ノ鼻型高坏は、漆町7群・9群～10群あたりに並行する可能性がある。よって、時期は漆町9群～10群並行に絞り込まれる。

田嶋(2015)は、東日本の高坏を、8期(新潟シンボ編年8期=漆町8群)以前(「I群」)と9・10期(「II群」)に大別し、「II群は杯部の縮小化と脚部の細身・長脚化に特徴をもつ」としている。示された多数の実測図をみると、「II群」は明らかに「I群」より長脚であり、坏高よりも柱状部高が勝っているものがほとんどである。「II群」の中において柱状部が最も短いもので、坏高：柱状部高＝1：0.8である。猪ノ鼻(1)型高坏は坏高：柱状部高＝1：0.7であることから、サイズ比だけで見た場合は、「I群」(漆町8群以前)に近づく可能性が高まるが、上述の検討により、漆町8群は除外されることから、猪ノ鼻型高坏は漆町9群の古い時期に並行する可能性が考えられる。

以上、SK06の後北C2・D式(ブロック1)、SK06・SK07の古式土師器(06個体N・07個体N・06+07個体F)、SK04+SK55の古式土師器(猪ノ鼻型高坏)の編年の位置を検討した結果、これらの土器は「漆町9群」並行期を中心とした時期に位置づけられるものと推定される。

9 土坑墓の年代

A B両群の6基の土坑墓から得られた炭化物について年代測定を行った。結果、縄文時代の炭化物や、後世に混入した奈良・平安時代の炭化物なども複数含まれていたが、土坑墓に関係する年代値を示すものが10点ほど得られた(表3：全てIntCal20で較正¹²⁾)。

表3 土坑墓出土炭化物の放射性炭素年代測定結果

| 年代値 | 測定番号 | 試料名 採取場所 | 試料形態 | $\delta^{13}\text{C}$ (‰) (AMS) | $\delta^{13}\text{C}$ 補正あり Libby Age (yrBP) | 暦年較正年代 (1 σ 暦年代範囲) | 暦年較正年代 (2 σ 暦年代範囲) |
|-----|-------------|---|---------------|------------------------------------|--|---|---|
| | IAAA-200499 | No.18-INH-SK08-FLO-334 SK08 覆土(テマエ④) | 木炭 | -27.32±0.18 | 1,900±20 | 85calAD - 95calAD (8.1%) 117calAD - 169calAD (45.7%) 185calAD - 203calAD (14.5%) | 77calAD - 210calAD (95.4%) |
| ① | IAAA-200492 | No.11-INH-SK06-FLO-054 SK06 覆土(4～5層) | 木炭 | -27.41±0.16 | 1,830±20 | 209calAD - 245calAD (68.3%) | 131calAD - 144calAD (2.3%) 155calAD - 253calAD (84.7%) 291calAD - 318calAD (8.5%) |
| ① | IAAA-200503 | No.22-INH-SK55-FLO-427 SK55 覆土(オク①) | 木炭 | -26.90±0.17 | 1,830±20 | 206calAD - 247calAD (68.3%) | 130calAD - 145calAD (3.2%) 154calAD - 252calAD (85.2%) 292calAD - 315calAD (7.1%) |
| ② | IAAA-181769 | No.05-INH-SK06-P32 SK06 覆土(4～7層) | 炭化物 | -24.83±0.19 | 1,790±20 | 239calAD - 253calAD (20.2%) 289calAD - 322calAD (48.1%) | 220calAD - 260calAD (32.7%) 278calAD - 337calAD (62.8%) |
| ② | IAAA-200493 | No.12-INH-SK06-FLO-061 SK06 覆土(オク⑨) | 木炭 | -25.84±0.17 | 1,790±20 | 236calAD - 253calAD (25.1%) 290calAD - 320calAD (43.2%) | 217calAD - 259calAD (38.6%) 280calAD - 331calAD (56.8%) |
| ② | IAAA-200494 | No.13-INH-SK06-FLO-133 SK06 覆土(オク⑧) | 木炭 | -24.89±0.16 | 1,780±20 | 242calAD - 255calAD (16.6%) 286calAD - 325calAD (51.7%) | 232calAD - 261calAD (26.8%) 277calAD - 339calAD (68.7%) |
| ② | IAAA-200497 | No.16-INH-SK07-FLO-233 SK07 覆土(テマエ①) | 木炭 | -26.83±0.17 | 1,780±20 | 241calAD - 254calAD (18.4%) 288calAD - 322calAD (49.9%) | 230calAD - 260calAD (29.1%) 277calAD - 338calAD (66.4%) |
| ③ | IAAA-181768 | No.04-INH-SK06SK01-1 SK06SK1 確認面(1層) | 炭化物 | -27.94±0.18 | 1,750±20 | 250calAD - 263calAD (12.7%) 275calAD - 295calAD (19.9%) 311calAD - 347calAD (35.7%) | 244calAD - 375calAD (95.4%) |
| ③ | IAAA-200502 | No.21-INH-SK47-FLO-394 SK47 覆土(オク②) | 木炭 | -27.22±0.18 | 1,750±20 | 250calAD - 263calAD (12.7%) 275calAD - 295calAD (19.9%) 311calAD - 347calAD (35.7%) | 244calAD - 375calAD (95.4%) |
| ③ | IAAA-200899 | No.26-INH-SK08-FLO-342 SK08 覆土(2層) | 炭化種子 (ウメ核) | -26.24±0.19 | 1,750±20 | 250calAD - 262calAD (12.9%) 277calAD - 296calAD (20.9%) 309calAD - 341calAD (34.5%) | 241calAD - 375calAD (95.4%) |

これら10点の内、200499は、弥生時代の年代を示しており、土坑墓の年代とは直接的には係わらないが、SK06やSK55から出土した弥生土器細片や遺構外から出土している弥生土器と関連する年代であると考えられる。ほか9点は、古墳時代の年代を含むものであり、3つのパターンに分かれている(図13)。具体的には、年代値①：2世紀前葉～4世紀前葉(中心値：3世紀前葉)、年代値②：3世紀前葉～4世紀中葉(中心値：3世紀後葉)、年代値③：3世紀中葉～4世紀後葉(中心値：4世紀前葉)、これら3つの年代である。

マルチプロット図で分かるように、異常と言えるほどにまとまったこの年代は、多種多様な炭化物の存在を否定するものである。即ち、1点含まれている「ウメ核」(SK08)のような短寿命の果実や小枝、小径材(の表面)などが葬送儀礼に伴って燃やされ、その結果生じた炭化物が砕けて各土坑墓に混入したものと推定される。つまり、この墓域の中で3回(①3世紀前半頃・②3世紀後葉～4世紀前葉頃・③4世紀前半頃)の燃焼行為が行われていた可能性がある。

これらの年代は、9点全てが土坑墓の埋土に混入した炭化物によるものであるため、土坑墓の構築や埋め戻し等の年代を直接的に示すものではないが、先の主要土器の編年学的な検討結果から導き出された「漆町9群」を中心とした時間幅を考慮しつつ、マルチプロット図の状況を参照すると、6基の土坑墓は、3世紀後葉～4世紀前葉頃を中心とした時期に形成された可能性が想定される。

(次稿につづく)

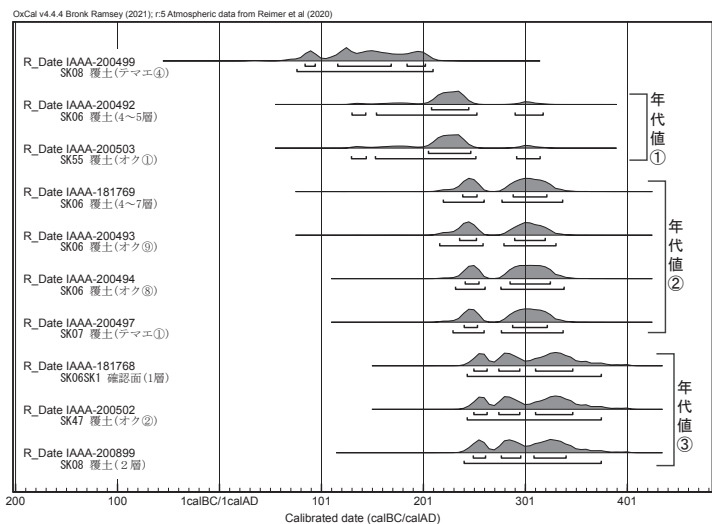


図13 土坑墓出土炭化物のマルチプロット図

(OxCal v4.4.4 Bronk Ramsey (2021); r:5 Atmospheric data from Reimer et al (2020))

註

- 1) 弥生文化系のものが岩泉町豊岡V遺跡で、古墳文化系ものが久慈市新町遺跡で検出されている。岩泉町教委 2006『豊岡V遺跡』岩泉町文調報第43集、岩手県埋文 2009「新町遺跡」『平成20年度発掘調査報告書』岩埋報第546集
- 2) 古墳時代に存在する弥生土器の系譜上に属す資料を指す。
- 3) 遺骸の安置後に柱を差し込むとなれば、頭部や脚部末端に柱の下端がぶつかる、あるいは柱穴状ピットの上に遺骸が覆いかかった場合などは、遺骸の一部を動かさなければならなくなるなど、芳しくない状況になることが想定される。よって、柱は遺骸の安置前に設置完了していると考えるのが自然であろう。
- 4) 藤本英夫(1964)は「…中略…のアイヌたちは、埋葬するとき、墓の底の両端に又木状の棒を立て、さらに一本の棒を又木に渡して、ヨモギを渡した棒にかぶせる。ちょうど墓の中が仮小屋のようになるのだが、その上に土をかぶせる…中略…」と記している。この事例は従来言われてきた「上屋」の構造を具体的にイメージさせるとともに、防虫等の効果を持つヨモギを用いている点が、上屋の実質的機能を推定する上で示唆的である。
- 5) 筆者の腕の長さは約60cmであり、SK08CP2の58cmとほぼ同じである。
- 6) SK08FP1のみ平面がやや大型であるが、秋田県能代市寒川Ⅱ遺跡の「第4号土坑墓」の副葬土器(略完形)は、壁面に密着させるように納められており、この部分は袋状には掘り込まれておらず、壁面を僅かに削っている程度である。よってSK08FP1の例も同様の状況を想定した。秋田県埋蔵文化財センター 1988『寒川Ⅱ遺跡』秋田県埋報 第167集 秋田県教委
- 7) 袋状ピットが副葬品の格納施設で、副葬品は被葬者の頭部付近に置かれる確率が高いと考えた場合、これら4基の頭位方向は北東主体と推定され、頭部の近くには柱が立っていた状況が想定される。

- 8) ブロック 2 の 3 個体の縄文原体は同一ではなく、刺突や沈線の施文方法に共通性はない等、個体間の技術差が著しく、1 人 1 個ずつ製作したような印象を受ける。
- 9) これら 3 個体の成形は土器製作を専門的に担っていた人物が行い、施文は工具使用に不慣れな人物(会葬者など=土器製作の門外漢)が行ったと推定している。ブロック 2 の 3 個体がやや厚手に作られている理由は、施文時における器体の変形を防ぐための配慮であると推察することもできる。土器製作を専門的に担っていた人物の指導の下、初めて工具を握った会葬者等は自分なりの文様を描き、供献した、というストーリーを想定した方が、ブロック 1 との完成度の格差を説明しやすい。
- 10) 久保寺逸彦(1969)は、「副葬品は傷つけたり、破壊して墓壇の中へ投げ入れる…(中略)…副葬品を何故破壊するか。アイヌの信ずるところでは、死者の霊は、死後肉体から遊離して、先祖(シンリッ) たちの住む「地下の国(ボックナ・モンリ)」へ行って、ふたたび元の人間の姿となって再生する。死者の生前使用した物—たとえば、眼鏡は、破壊されることによって、その眼鏡の霊は、形体から遊離することができ、副葬されて他界に行き、元の眼鏡に再生して、死者に使われるということである。これが、アイヌの宗教の根本観念なのである。」と述べている。よく云われる〇〇を封じる、〇〇を断つ、等の考えとは全く異なる点に注意したい。
- 11) 「精製土器」という表現が相応しい作りのものである。坏部(SK04出土)は底部と口縁部の間で稜を持つ箱形で、幅の広い口縁部は緩やかに反外する。外面のミガキは斜方向、内面は横方向であるが、外底面と内底面にミガキなどの調整はみられない。赤彩は、赤鉄鉱由来の非パイプ状ベンガラ(片岡太郎2021)であるが、大きな黒斑とその周囲のベンガラは薄くなっていることから、この黒斑は焼成時のものではなく、儀礼等に伴う被熱痕と判断される。
- 脚部(SK55出土)は円柱状を呈し、途中まで中空である。坏部よりも柱状部の高さは低く、短脚の部類に属す。裾部の屈曲部以下は意図的に打ち欠かれているようで、接地面は残存していないが、水平に打ち欠かれているため、坏部を載せて自立することが可能である。成形は、円柱状の粘土に棒を刺し(?)竹輪のように整えた後、指(?)を差し込んで微調整されているとみられ、穴の先端は丸みを帯びているが、断面形は筒状であり、器台の断面形を彷彿とさせる。ただしこの穴は、成形に伴う痕跡ではなく、乾燥不良による亀裂や焼成時における破裂を回避するために施されたものとみることできる。外面には縦位のミガキが加えられ、裾部との境は屈曲が明瞭である。坏部と脚部の接合は、脚部の上端側面に、底部穿孔状態の坏部を接着させる作りとみられる。
- 12) IntCal20を用いた較正とマルチプロット図の作成は山田しょう氏にご協力いただきました。深く感謝申し上げます。

引用文献

- 青森県埋蔵文化財調査センター 2021『猪ノ鼻(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第616集 青森県教育委員会
- 阿部義平 2008『寒川遺跡・木戸脇裏遺跡・森ヶ沢遺跡発掘調査報告(下)』国立歴史民俗博物館研究報告 第144集
- 石橋宏・大賀克彦・西川修一 2016「面野井再考」『東生』第5号 東日本古墳確立期土器検討会
- 大沼忠春 1982「後北式土器」『縄文土器大成 5 続縄文』講談社
- 大賀克彦 2002a「古墳時代の時期区分」『小羽山古墳群』清水町埋蔵文化財発掘調査報告書V 清水町教育委員会
- 大賀克彦 2002b「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』9 小学館
- 大賀克彦 2021「猪ノ鼻(1)遺跡出土の玉類」『猪ノ鼻(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書 第616集 青森県埋文センター
- 大島秀俊 1991「考察」『小樽市蘭島餅屋沢遺跡』小樽市教育委員会
- 折登亮子 2022『舟場向川久保(2)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第625集 青森県埋蔵文化財調査センター(印刷中)
- 片岡太郎 2021「猪ノ鼻(1)遺跡出土古墳時代の土器の彩色について」『猪ノ鼻(1)遺跡』青森県埋蔵文化財調査報告書第616集 青森県埋蔵文化財調査センター
- 木村高 2011「東北地方の縄文文化」『講座日本の考古学 7 古墳時代(上)』青木書店
- 久保寺逸彦 1969「アイヌの死および葬制」『アイヌ民族誌』アイヌ文化保存対策協議会 第一法規
- 鈴木信 2003「道央部における縄文土器の編年」『ユカンボシC15遺跡(6)』(財)北海道埋蔵文化財センター調報書第192集
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2008「古墳確立期土器の広域編年…東日本を対象とした検討(その1)…」『石川県埋蔵文化財情報』第20号 石川県埋蔵文化財調査センター
- 田嶋明人 2015「東日本にみる9・10期の高杯」『東生【特集】屈折脚高杯』第4号 東日本古墳確立期土器検討会
- 次山淳 1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』埋蔵文化財研究会15周年記念論文集 埋蔵文化財研究会
- 辻秀人 1995「東南北部における古墳出現期の土器編年 その2」『東北学院大学論集 歴史学・地理学』第27号 東北学院大学学術研究会
- 西川修一 1981「内原遺跡における古墳時代前期の検討」『長井町内原遺跡』横須賀市文化財調査報告書第9集
- 西村歩 2011「土師器の編年 ③近畿」『古墳時代の考古学 1 古墳時代史の枠組み』同成社
- バリノ・サーヴェイ 2021「猪ノ鼻(1)遺跡出土古墳時代の土器の胎土分析(ポイントカウント法)」『猪ノ鼻(1)遺跡』青埋報第616集
- 比田井克仁 2001「古墳時代前期の土器様相の展開」『関東における古墳出現期の変革』雄山閣
- 比田井克仁 2004「二重口縁壺の東国波及」『古墳出現期の土器交流とその原理』雄山閣
- 藤本英夫 1964『アイヌの墓 考古学からみたアイヌ文化史』日経新書3 日本経済新聞社
- 米田敏幸 1991「土師器の編年1 近畿」『古墳時代の研究 第6巻 土師器と須恵器』雄山閣